

## 文学作品を用いた英語学習の意義と課題

### Significance and Issue on Using Literary Texts in English Education

江 頭 理 江

Rie EGASHIRA

英語教育ユニット

(令和4年9月30日受付, 令和4年12月20日受理)

#### 1.

2014(平成26)年9月に当時の英語教育の在り方に関する有識者会議によって出された「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm))は、その後の小中高等学校における、英語教育の道筋を大きく変えることとなった。その背景として「グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である。アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべき」ことが挙げられ、併せて「我が国の英語教育では、現行の学習指導要領を受けた進展も見られるが、特にコミュニケーション能力の育成について改善を加速化すべき課題も多い」と記されている。この段階での近い将来取り組むべき大きなイベントとして、東京オリンピック2020があったため、それが重要視されており、将来予測については、「2050(平成62)年頃には、我が国は、多文化・多言語・多民族の人たちが、協調と競争する国際的な環境の中にあることが予想され、そうした中で、国民一人一人が、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが想定される。」と述べられている。

この提言以降、英語力の向上は、日本における英語教育の喫緊の課題となった。ここで用いられる「英語力の向上」とは、文脈全体を通してみれば、特に英語における実践的コミュニケーション能力の向上を意味していることがわかる。その後、小中高等学校の学習指導要領の改訂が行われ、提言内の「『英語を使って何ができるようになるか』という観点から一貫した教育目標(4技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む)を示す」ことも挙げられた。「高等学校卒業段階で、例えば英検2級から準1級、TOEFL iBT60点前後以上等を設定」といういわゆる英語の資格試験を用いた目標値も掲げられたのである。

2022年現在、小中高等学校の英語は、2017, 2018(平成29, 30)年告示の新学習指導要領のもとで、授業が行われている。小学校では3, 4年生で「外国語活動」5, 6年生で教科としての「外国語」が実施されている。コミュニケーション能力の素地を養い、慣れ親しみを基本とした授業が、クラス担任、英語専科教員、ALTとの協働作業で実施されている現状である。中学校では指導要領に示された「オール・イングリッシュ」の授業目標に教員は奮闘しつつ、試行錯誤も続いている。表面的には、英語の世界の新たな方向性について、その実践的能力向上を旗印に掲げて取り組んでいるように見える。かつての授業の振り返りが提言内で行われているが、例えば中高等学校授業に関しては「目標としてコミュニケーション能力を身に付けることを設定しながら、『英語を用いて何ができるようになったか』よりも、『文法や語彙等の知識がどれだけ身に付いたか』という観点で授業が行われているとの指摘がある。」中高等学校においては、英語でコミュニケーションを取れるようになるために、文法や語彙を重視することよりも、英語の実践的態度を身につけさせようということなのであろう。

このような流れの中で、英語の文学作品を素材とした教材は、いわゆる英語教科書・テキストの中から、減り続けている。先の提言以降突然にというわけではなく、コミュニケーション力重視の傾向のもと、その

現象は日本の英語教育界では継続的に進行してきたという印象である。登場人物が置かれている精神的状況を表すための多くの語彙や複雑な文法事項が含まれる英語の文学作品は、英語の実践的コミュニケーション能力の向上のためには、利する部分が少ないと判断されたのであろうか。

執筆者の主たる研究領域は、アメリカ文学であるが、教育領域は、一般外国語、中高校英語教員養成のための英語文学、小学校英語である。長年、大学において英語の教育に取り組む中で、文学作品が教材として使われなくなってきた傾向を、懸念をもって見つめてきた。「なぜ英語の文学作品が、英語力の向上、英語実践能力の向上に不向きであるとみなされるのか」という問題に対峙し、それらの解決への取り組みとして、文学作品を用いた大学の英語テキスト作成にも関わってきた。そのテキスト使用を通して、この問題に向き合い、まずは大学の英語教育の場面から考察したのが本稿である。「なぜ英語の文学作品が、英語力の向上、英語実践能力の向上に不向きであるとみなされるのか」という命題を本論文において分析する。上記の小中高等学校の英語の問題にも視野を広げることも目指す。

## 2.

上述の提言においては「英語力の向上」という文言が用いられているが、そもそも英語力とは何を意味するのか？簡単には定義しにくいというのが実感である。英語力を見るための資格試験の一つとして「英検」があるが、英検 HP において「試験問題は、4 技能のバランスを重視し、社会で求められる実用英語を出題しています。」とあり、4 技能いずれをも網羅した内容であることがわかる。

(<https://www.eiken.or.jp/eiken/merit/>)

また同じく資格試験である TOEIC、TOEFL はそれぞれ以下のような説明をしている。

### TOEIC

日常生活やグローバルビジネスにおける活きた英語の力を測定する、世界共通のテスト。

聞く・読む力を測る **TOEIC® Listening & Reading Test** と、話す・書く力を測る **TOEIC® Speaking & Writing Tests** により、4 技能（聞く・読む・話す・書く）全ての英語コミュニケーション能力がわかります。

([https://www.iibc-global.org/toEIC/toEIC\\_program.html](https://www.iibc-global.org/toEIC/toEIC_program.html))

### TOEFL

主に大学・大学院レベルのアカデミックな場面で必要とされる、英語運用能力を測定する試験です。

自然科学、社会科学、芸術など幅広い分野の教養科目や学校生活に関する題材が扱われます。また、「読む」「聞いて」その上で「話す」「書く」など、実際の留学生生活を疑似体験する Integrated task という問題形式も含まれ、より実践的な英語力を測ります。

([https://www.toefl-ibt.jp/test\\_takers/toefl\\_ibt/advantages.html](https://www.toefl-ibt.jp/test_takers/toefl_ibt/advantages.html))

日本において、「英語力」を判定するために用いられているこれらの試験においては、英語の 4 技能を測ることが主眼であり、たとえば、「話す」「聞く」だけが突出して切り分けられているのではないことがわかる。TOEIC の説明文中の「Listening & Reading Test と、Speaking & Writing Test により、4 技能すべての英語コミュニケーション能力がわかる」という表現は注目すべきで、コミュニケーションに含まないとみなしがちな Reading（読む）を、ここではコミュニケーションに含めている。つまり英語コミュニケーションとは、直接的、表面的に言語を使用してやり取りするだけでなく、さらに深い心情や考えを表現する範囲まで含んでいることがわかる。また、TOEIC は、その目的が、「日常生活やグローバルビジネスにおける活きた英語の力を測定する、世界共通のテスト」と記されている。ビジネスの世界で通用する英語力については、ビジネス文書を読んで相手と交渉することが求められており、「読む」ことが重要な位置づけを占めている。ビジネスの相手と交渉するためには、相手の文化的背景や社会状況を理解した上で、高度な英語力を駆使することが求められているのである。アイスブレイク的は英語しか使用できないのでは、英語での交渉などできるはずもない。

このように見てくると、文科省の提言において掲げられた「英語力の向上」「英語の実践的コミュニケーション能力の向上」と、これらの資格試験が目指すものとの間の本来の矛盾はなさそうである。実際、文科

省は、今年公表の「令和3年度英語状況実施調査」においても、一部資格試験結果を用いている。(https://www.mext.go.jp/content/20220516-mxt\_kyoiku01-000022559\_2.pdf) 文科省が掲げる「英語力の向上」は、「4技能すべての英語コミュニケーション能力」の向上と見なすことができるが、実際の英語の教育現場では、そのように捉えられているのであろうか？

提言の中では、英語の「コミュニケーション能力を身に付ける」ことが、最重要目標である。提言時点での中高等学校については、「文法訳読に偏ることなく、互いの考えや気持ちを英語で伝え合う学習を重視する」と説明があり、英語授業において「文法訳読に偏っていた」ことが、英語の授業を長年受けていても、英語を話せない大きな理由と見なされていることもわかる。

「文法訳読」中心の指導法が、英語の長文を用いた授業において用いられてきたことは、事実であろう。読む指導において、ある長さの文章を、学習者の理解を深め、確認するためには、読解を行うことが常であった。その長文に含まれる文法事項も、訳読型授業の中では重視されてきた。逆に言えば、訳読をせずに、どのように、学習者にその内容を教授し、また学習者の理解度を確認すべきか、適切な方法が見出しにくかったと言い換えてもよからう。そして、長文用教材として、かつては文学作品が用いられることが多かったため、安田優・轟里香が述べるような状況が生まれたと考えられる。「文学という言葉が引き起こすかもしれない否定的な響きは、過去の訳読中心授業の弊害と言えるかもしれない。文学＝訳読用の教材という図式が広まっているのである。」(78) また、田口誠一が記すように、「文学作品の英語は特殊で実用的でなく、授業にしてもリーディング中心の訳読となる場合が多いため、リスニングやライティング、スピーキング能力向上への効果も期待できないとされたのである。」(72) この「文学作品の英語は特殊で実用的でない」ということも、しばしば言われてきたことであるが、果たして本当にそうなのであろうか。このような判断をされてきたことが、英語教育の教材・テキストから、文学作品排除の傾向が強まった理由の一つであろう。文学作品が英語の教材・テキストから排除される傾向が強まった理由を、以下のように整理する。

- ① 英語の読解、特に英語の長文の読解は訳読中心に行われてきたこと
- ② 英語の文学作品が長文教材に用いられ、それらの指導が訳読中心に行われてきたこと
- ③ 英語の文学作品の英語が実用的でないと思われたこと

次章においては、これらの問題点を踏まえ、英語の文学作品を教材として使用する利点について考えることとする。

### 3.

2で述べた三つの理由について、久世恭子が整理した三つの論点もほぼ同様の内容であるが、それらの意見が挙げた根拠として久世が挙げた三人の研究者の批評は、注目に値する。

「英語に限らず、ことばによるコミュニケーションの大部分は、事実 に即したものである。(中略) フィクション的なものしか考えられない英語教師(英文学関係者)が、英語学習環境汚染をしているゆえんである。」(藤掛, 1982, 13 久世 75)

「学生の今の関心は英語をコミュニケーションの道具として身につけることであって、英語で書かれた文学作品を読むことではない。」(羽鳥, 2002, 51 久世 75)

「日本の中等教育で Communicative Approach が浸透しない理由の第一は英文学専攻の教師が多いことである。」(Nishino & Watanabe, 2008, 133 久世 75)

この中に、日本の英語教育を取り巻いてきた根深い問題が隠れている。英語教員の中で、英米文学専攻出身者とそれ以外の分野専攻の者との間で、教育方法に関する対立があり、コミュニケーション重視の傾向が強まる中で、文学作品排除の動きが加速したと見える。2で述べたように、コミュニケーションというのは、そもそもは英語の4技能を包括したうえでの観点であるはずなのに、それらが分断されて、英語の文学作品を読むことが、コミュニケーション活動への弊害として捉えられ、その原因に英米文学出身者と英語教育出身者の対立があったと考えられるのである。

文学作品が軽視されるに至った理由について、上述した久世が整理した三つのカテゴリーを以下に挙げる。



- ① 文学教材を用いる授業では教授法として文法訳読式を用いると決めつけて受け取られ、母語を通しての教師から学習者への一方的な授業形態になりがちなので、コミュニケーションにはそぐわない印象がある。
  - ② 教授目的或いは活動内容であるが、文学を使うと学習者の活動がリーディング中心になり、それ以外の技能—リスニングやスピーキングなどのオーラルの能力はもちろんのこと、ライティング能力さえ—を向上させることが期待できない。
  - ③ 文学作品の言語そのものに関わる問題で、文学で用いられる言語が日常生活から離れた特殊なものであるため実用的コミュニケーションには役だたない。
- (75-76)

英語におけるコミュニケーション重視の傾向は、日本のみにとどまらず、世界的傾向である。そのような中で、第二言語習得の形で英語を教授し研究する者たちの間でも、英語の文学作品を授業で用いる利点を指摘する声が上がっている。例えば、Hall は以下のように主張する。

Discourse is 'how it is said' and 'how it is read', and the contexts in which language is used and processed, both immediate, linguistic, and in wider social and cultural terms, explain how meanings arise between language users. These contexts, so far as literature is concentrated, are very often educational. (1-2 江口 77-78)

ホールは、「ディスコースとはどのように語られ、どのように読まれるかということであり、言語が用いられる文脈とは、言語使用者の間でどのように意味が発生するかを説明するものである。文学が関与する限り、これらの文脈はしばしば教育的である。」と述べており、どのように語られたのか、どのように読まれたのかという文脈が、文学が関与する場面において、教育的に意味があるということを述べている。

また、サウジアラビアの M Shamsur · Ali Mohammad は、“Literary texts play an important role in learning English language, especially enhancing communication competence, raising cultural awareness, and generating motivation among students.” (1) と述べており、日本と同じ第二言語習得に関連する英語教授環境の中で、英語の文学作品を使う利点を、コミュニケーション能力の向上、文化的理解の促進、モチベーションの向上と整理している。

執筆者と早瀬博範とはこれまでに共著で、英語の文学作品を用いた3種類の英語テキストを作成してきた。それらは、英語の授業で文学作品を使用した場合に生じると見なされてきた問題点（執筆者自身の整理したものも含めて）の解消に、果たしてつながることができたのであろうか。ホールとシャムシュールらが指摘した、文学作品を用いる利点を、具体的にテキストを使用した授業で実現できているのかについて、次に検討する。

#### 4.

執筆者と早瀬は、以下の3種類の大学用英語テキストを出版してきた。

- I 『*Let's Learn English from American Literature* —アメリカ文学から英語を学ぼう』 英宝社  
2010 年
- II 『*Let's Learn English from American Literature II* —アメリカ文学から英語を学ぼう II』 英宝社  
2015 年
- III 『*Let's Learn English from American Literature III* —アメリカ文学から英語を学ぼう III』 英宝社  
2022 年

テキスト内に用いたリーディング素材は、アメリカ小説からの抽出部分であり、原著の出版年は19世紀から20世紀である。いずれもアメリカ文学においてはポピュラーな作家の作品を用いている。長編も短篇も含んでいるが、詩は含んでいない。

テキストはいずれも下記の構成による。

- ① 「作家を知ろう！」作家に関する紹介・説明
- ② 「作品紹介」使用した小説の全体的な概要、抽出部分前後の説明
- ③ 「Check the Vocabulary」リーディングパートに出てくる重要単語を確認するための問題
- ④ 「Reading」本文、総語数は500語程度、難しい英語表現は欄外に注。B4見開き構成。
- ⑤ 「Exercise」
 

True or False	Reading 本文を用いた正誤問題
Questions & Answers	Reading 本文の内容を問う主に4択の選択型問題
Grammar	Reading 本文から重要な文法事項を抽出し、正答選択型問題
Agree or Disagree	Reading 本文内容に関して学習者の意見を問う記述型問題

このような構成を持つテキスト作成を思い立った動機について、説明する。執筆者と早瀬は、長年 William Faulkner や Mark Twain をはじめとしたアメリカ文学の研究を専門としてきたが、総合大学の教育学部や教育大学に所属し、英語教育についても、教育面、研究面ともに関わってきた。一般の外国語科目としての英語を担当した経験もあり、文学部や教育学部の英語専門学生ではない、一般学生の英語教育にも携わってきた。そのような状況の中で、上で述べたように、英語の文学作品が大学の英語教材として扱われる頻度が急速に落ち、かわって、TOEIC や TOEFL をターゲットとした教材が多数出版され、英語の実践的能力を上げたい学生の志向もそちらに傾きがちであることを、憂いてきた。コミュニケーション重視の傾向の中で、実践力向上を目指すタイプの英語テキストを用いる場合も多かったが、学生によっては力の向上を見せる者もいるが、全体としては、学生の英語実践力が大きく向上している実感はなかった。執筆者の担当する一般の外国語（英語）の授業の中で、学生に英語を話させた時、最初の五つくらいの英語の文章は、以前の学生と比べると口からスムーズに出るようになった印象であるが、アイスブレイクの5文程度を過ぎると、急速に英語が出なくなるという印象を持った。最初の5文というのは、始めの挨拶、天候の話題、簡単な自己紹介などであり、それらを英語で言うことのハードルは、以前より下がっていると感じる。これは、既に述べた中高の英語改革の成果であろう。気がかりなのは、その5文程度を過ぎると、英語が急速に口から出にくくなるという様子であった。アイスブレイクにより相手との会話がうまくスタートしても、その後の本題の部分になると、英語が話せなくなる学生の様子をしばしば見てきた。学生個人の本来の英語力・学習状況による部分もあるので、一概に全ての学生がそうだとは言いきれないが、少なくとも執筆者が担当してきた授業においては、学生にそのような傾向が見られた。

そこで、TOEIC や TOEFL タイプのテキスト使用をいったんやめて、アメリカ文学の小説を用いての授業を始めた。学生に英語の小説の中身を問いながら、併せて個人の意見を英語で問うタイプの授業を20年ほど前から始めた。当初は、平易な英語に書き換えたラダーシリーズ、ペンギンリーダーズの4～6レベルを用いて、内容確認を問いながら、考えを書かせ（話させ）ながら読み進み、1冊を読み通すことを目的としての授業を10年程実施した。リーダーズシリーズであっても、英語の洋書を1冊読み通すというのは、学生にとっては英語学習の大きな動機付けとなった。ペンギンリーダーズを読み通すことが出来たら、次にはリーダーズ原著の読みたいという学生も出てきて、小説を読み通すこと、ほんものの英語の小説を読み通すことが、学生にとって、英語学習の動機づけになることを実感した。一般の外国語（英語）の授業には一定数の学生がおり、彼らを同時に学習させるためには、学生に同時に内容に関する質問を提示し、思考させる必要があることも感じた。かつての長文の訳読型の授業においては、学生を指名して、その学生がテキストのある部分を訳す、その間、他の学生は訳を聞いているだけで、授業がおもしろくないという声が挙がっていたが、小説をテキストとして、学生に質問を同時に行い、重要な箇所については学生に考えを書かせるタイプの授業の中では、彼らは休む暇がなかったのである。ラダータイプのテキストにおいて、訳読を行わなかった理由は、その英文が原著でなく、書き換えられたものであることによる。書き直された英文を訳読した場合、あくまでも内容概略やニュアンスを訳しているに過ぎない。作家が描いた物語そのものではないため、訳読することは、内容を確認することと同じ意味合いを持つ。

ラダータイプに物足りなくなった学生は、原著がある場合はそれを読むことを始めた。いわゆる多読の形で多くの英語の小説に取り組み始めたのである。その学生の中から、TOEIC や TOEFL の高得点を取る者が出てきた。これまで英語の小説は読んだことがなかったが、読み始めたらおもしろくて、どんどん読んでしまう、そして登場人物のせりふや考えを、自分にあてはめて考えてみる、というような感想が、学生から聞こえ始めたのも、この頃であった。それ以降、ラダーシリーズをやめて、書き換えがされていない原著の

アメリカ小説を、英語の授業に用いることとした。Edgar Allan Poe の“The Black Cat”は学生にもっとも評判の良かった一冊である。平易な英語ではないが、展開が早く、場面は時に怖く、印象的なものが多い。主人公の心情にも共感しやすく、「自分だったらどうするだろうか」「この時の主人公の心情はどのようなものだろうか」このように感じる学生が多かった。短篇小说であるため、分量は多くない。英語は平易でないために、教師側からの説明は必要であった。しかし説明を多くしすぎると、訳読型に近い授業になり、学生を退屈にする。学生が自分の意見を述べる時間も少なくなる。それらを配慮しながら授業を進める中で、リーディング部分に解説を付し、内容理解を進めながら、最後には学習者の意見を英語で問うタイプのテキストがあれば、よいのではないかとの思いに至った。このような授業を推し進めるうちに、英語の文学作品が英語学習の宝庫であることを実感した。それらの思いを、同種の研究・教育環境にある早瀬と共有し、アメリカ小説を用いた総合型の大学英語教材の作成を開始した。後述するが、このタイプの英語テキストは、異文化理解の促進にも繋がる。上記に説明したテキスト構成のうちの①と②の部分、作家と物語の説明において、作品出版当時のアメリカの時代や社会状況を盛り込み、そこからアメリカという異なった文化で展開される世界を学習者は垣間見るのである。

『*Let's Learn English from American Literature*』のまえがきにおいて、テキストの目指す方向性を挙げている。

今日必要とされる「英会話力」とは、ワンパターンの表現を機械的に暗記し、挨拶や旅行で使用するための技能だけではなく、世界の人々を相手に、自分の意見や感情を的確な表現で伝達し、相手に十分理解させる能力だからである。……

近年文学作品は英語学習の題材としては不適だと考えられ敬遠されてきたが、決してそんなことはない。実は、文学作品は英語学習の宝庫である。読者の興味を引くような題材とストーリー、考え抜かれた思想や英知が、選び抜かれた言葉遣いで表現されている。このテキストは、そのような文学作品のもつ魅力が最大限に発揮されたものを題材とし、様々な問題を解きながら、その物語世界に入っていけるように工夫されている。学習そのものが楽しくなるはずである。……

このテキストは、「学習者に本物の文学作品を読ませて、なまの英語に触れさせること」と「学習者の気付く・感じる力を引き出し、より実践的な英語学習につなぐこと」を目的としている。……

本文の英語には一切手を加えていないため、最初は少々難しく感じるであろう。しかしながら、問題を解き何度か読んだり聞いたりしているうちに、必ずや物語の世界が頭の中に思い描かれるはずである。そうなればしめたものである。あなたの「英語のちから」は必ず上がる。(iii)

「文学作品は英語学習の宝庫」「考え抜かれた思想や英知が、選び抜かれた言葉遣いで表現されている」「なまの英語に触れさせる」「学習者の気付く・感じる力を引き出し、より実践的な英語学習につなぐ」これらのトピックは、久世が整理した三つのカテゴリーの中の「コミュニケーションにはそぐわない」「実用的コミュニケーションには役立たない」という、文学が英語教材としてそぐわないとされる部分を解消し、英語の実践力の向上に役立つことを示している。併せて、英語の教授法にも触れている。

題材が文学作品だからといって、英語力を育成するための指導法や訓練法が変わるわけではないし、コミュニケーション力の育成につながらないはずはない。むしろ生きた言葉の結晶としての文学作品の魅力が生かされ、それを土台として、しっかりとした英語力を身に付けてもらいたい。(iv)

原文そのままの「なまの」アメリカ小説を素材として用いて、それに作家自身の背景、当時のアメリカの社会情勢を盛り込み、単語の理解、内容確認を行い、最終的には Agree or Disagree パートにおいて、学習者の考えを問う形の教材は、どのような効果を上げてきたのであろうか。『Ⅰ』『Ⅱ』を継続的に使用したのち 2022 年に出版した『*Let's Learn English from American Literature Ⅲ*』において、『Ⅰ』『Ⅱ』を振り返り、その上でどのような効果を目指しているのか、改めて具体的に触れている。「まえがき」部分を以下に挙げる。

コミュニケーション重視の実用英語が求められている時代にあって、当初「文学作品で英語を学ば



う」という企画は、一見時代錯誤のように思われたが、これまでの2冊の教科書の反響をみると、予想以上にニーズがあったことを知らされた。第1弾の際に「実は文学作品は英語学習の宝庫である」と謳い、アメリカ文学を代表する作家と作品のエッセンスを題材として、それに TOEIC 形式の設問を準備し、基本的な語彙、文法、内容理解に関するチェック、そして少し文学的な「問いかけ」を織り込んだシリーズは、喜ばしいことに「固定客」を獲得し、第3弾めの発行の運びとなった。……

この企画を始めたのは、文学作品が英語力教科のための教材として高い可能性をもっていることを、具体的な方法で提案しなかったからである。従来の訳読式の授業では、今の学生には振り向いてももらえないので、本書では、その料理法に工夫をこらしている。もとより日本の一般の大学生が読めるレベルの部分を抜粋しているが、辞書をつかわなくても読み進められるように注解をつけた。さらに、いちいち訳読しなくてもいいように、Exercise は作品の内容理解に関する問題にしている。そして Agree or Disagree が作品解釈に関係する部分であり、ここで様々な意見を出し合うことで、文学の楽しさ、奥深さを感じてもらえればと願っている。(3)

従来の訳読式の授業が孕んでいた問題点には、人が訳すのを聞いていたのでは面白くないし、なかなか先に進まない、テキストについて自分の意見も言えないということが大きかった。なぜ、文学作品を訳読していたのであろうか。第一には教師が学生に理解させるためには英語を訳すしかないと考えていたこと、学生が物語を理解しているか否か確かめるためには、訳させるしかない、と捉えていたことが大きな要因であろう。久世が挙げた三人の批評の中に、「Communicative Approach が浸透しない理由の第一は英文学専攻の教師が多い」という意見がある。英文学専攻出身の教師は、英文科の文学専門の授業の中で小説を訳読式で学んできたため、自らが英語の長文を教える際にもそれ以外の方法が思いつかなかったということなのであろう。英文科では、じっくりと英文を読む場面が多かったことは事実であり、執筆者自身も英文学専攻出身であるが、それを否定はしない。このような方法において、英語を読んで考える力は大いに向上したと自らは実感している。訳読型の授業において、英語と日本語のニュアンスやその表現方法の違いも知った。明治時代に訳読型の英語の授業を受けてきた日本人の中にも英語を書いたり話したりする場面での達人はいるわけで、コミュニケーション力が上がらなかった理由を、すべて訳読式授業のせいにすべきでも本来はなからう。訳読型の授業の問題点が、面白くない、進まない、意見を言えない、という点にあるならば、いちいち訳読しなくてもいいように、Exercise においては内容理解に関する問題を出し、最後にディスカッショントピックを設定し、学習者が意見を言える環境を作ればいいのである。

従来の文学作品を素材とした授業の問題点の解消を目指して作った、執筆者と早瀬編集のテキストにおいて、学生はどのような反応を見せているのか。次章で、その一例を挙げることにする。

## 5.

執筆者が勤務する教育大において、2022 年度前期、1 年生用の一般外国語（英語コミュニケーション）の授業において、『*Let's Learn English from American Literature III*』を使用して、15 回の授業を行った。対面式の授業であるが、学生はパソコンを持参し、教師側からの追加情報と課題の回収は、Google Classroom を用いて行った。コミュニケーションの授業であるため、学生に英語で考えさせる、語らせる、書かせることを中心に掲げ、授業内と授業後に Google Classroom を使って、学生の考えや意見を英語で提出させた。コロナ禍であり、対面授業であっても、実際に英語のやり取りをさせることに無理があるため、コミュニケーションの具体的な場面は、英語で書くことが主な活動となったが、英語で考えを言わせる、テキスト部分を英語で重ね読みさせる、これらを音声ファイルで提出させることも同時に行った。一クラスの受講生数は 24 名であったが、この授業において、学生が、授業後のアンケートにどのような回答をしたのか、見ることとする。「英語の力を上げるために、英語の小説教材は有効であると思うか。考えを述べよ」という問いに対して、学生は以下のような回答をした。

I think these sentences are effective because they use words and grammar that I have not seen before. Frankly, I find them difficult. But I believe that challenging difficult things will help me to grow. Reading these texts has helped me develop an interest in American literature. I would like to read another story if I have the chance.

I agree. English novel is written by real English in the time. Textbook is easy for us to understand. Textbook is to teach the English for us. It has some difference. English novel is thinking the why author selected this word. We think the difference of subject. English power is not only to answer the question. Thinking of hidden of word is very useful for us to improve it.

I think that reading English novels would be effective in improving my English. I think basic English skills are necessary. It was a little difficult for me who is not good at English. However, I felt that it was much better to read English novels than texts written by Japanese people. This is because English novels allow you to learn authentic English expressions and learn about culture. I actually read two stories I was answering in my final exam. I read a lot of Japanese novels in everyday life, I was very grateful to be able to learn English through novels. I want to read English novels from now on.

These English novels are effective to raise my English ability. I could learn many expression by reading these novels. Also, I think it is important for us to learn English history to raise English ability. I could learn about English history by reading these novels. So, I think these English novels are effective to raise my English ability.

I believe that English novels are effective in improving English ability. In fact, when I was studying for EIKEN Grade2. I learned a lot about how to express myself in literary works that are intended to communicate with others. As a result, I passed EIKEN Grade2.

I have English Proficiency Test level 2, but these English novels are very hard for me. It is because I have studied English for Common Test only in the third year of high school, I don't get used to read and understand long novels. But these stories were interesting for me, I study hard English more than now. And I want to get English Proficiency Test level pre-1st grade.

学生の回答には英語の間違いもあるが、多くが文学作品を用いた英語コミュニケーションの授業を好意的に受け止めたことがわかる。「当時のリアルな英語に触れられた」「今までに見たことのない単語や文章に触れられた」「日本人が書いたものより英語の小説を読んだ方がよりよい。それは、英語の小説からほんものの英語表現を知り、文化について学べたからである」「英語の能力を上げるためには、歴史を知ることも必要である。」「他者とコミュニケーションするためになすべきことを英語の小説から学び、英検2級に合格した」「英検2級は持っているが、それでも英語小説は難しい。これらの小説は興味をかきたて、今は英検準1級の勉強をしている」という回答からは、英語の小説に興味を持てるようになったことや、さらに読みたいという動機付け、また英語の資格試験である英検にも有効である、というような学生自身の生の声が聞こえた。有効回答数の中で、20人が、英語の小説が英語力の向上に有効であると回答している。一方、有効でないと回答した下記の学生の意見も注目に値する。

I disagree. It is difficult for those without English language skill to read English novels. English novels often use difficult sentences and words. So, I don't believe that reading English novels lead to the development of English language skills.

I think shadowing will improve your English. In fact, according to my experience, by listening with my ears and voicing the words I heard, I naturally increased my reading speed of English texts and improved my English ability. You can listen to English by using YouTube now. YouTube is easier to use than English novels. Therefore, I don't think to use English novels for improving my English is effective.

この学生は、「英語の文学作品の、文章や単語が難しい」と述べている。「文学作品は難しい」というコメントは、好意的な意見を出した学生からも挙がっている。素材とするアメリカ小説の中身を書き換えることなく、使用しているため、その点については、賛否もあろう。ただし、我々は、上述したように、「学習者



に本物の文学作品を読ませて、なまの英語に触れさせること」を目指しているため、テキストの英語の編集は行わない方針であった。物語内で語られるなまの英語は、登場人物の思考そのものである。それに手を入れて編集することは、学習者の理解をむしろ阻害し、自らの意見を英語で構築したり、発信したりすることにも影響を及ぼすと考える。登場人物たちのやり取り部分が、口語的で方言が多く、英語文法的には間違っている、彼らの生きる地域や時代の文化的背景がそこにある。『*Let's Learn English from American Literature*』には、Mark Twain の *Adventures of Huckleberry Finn* を 2 章にわたって取り上げているが、主人公の Huck と黒人奴隷の Jim のやり取りには、方言やアメリカ口語が多用され、例えば二重否定がただの否定の意味で繰り返されている。これを標準のアメリカ英語に直したのでは、19 世紀のアメリカ南部が抱えていた奴隷制という問題の本質を、学習者に見失わせることになる。後述するように、英語のなまの文学作品は、異文化理解の面にも大きく作用するため、英語の書き直しは行わないことが、テキストの基本スタンスである。文法事項の問題や、口語や難しい表現については、理解を促進するために、まずは重要単語の確認をさせた上で、注をリーディングパートに見やすい形でつけている。リーディングパートの欄外に、日本語の注を目に入る形で付している。英語と日本語注が学習者に同時に目に入ることは、実はテキスト作成の重要な要素であると考え。従来の長文型テキストにおいては、前半部にはリーディング素材が配置され、後半部に注が置かれていたことが多かったため、学習者はページを行ったり来たりしながら読まなければならなかった。そこに面倒臭さを感じる場合も多かった。これは執筆者自身も感じたことのある不便さであったので、テキストを開いた状態で、リーディングパートと注が同時に視覚に入るように、構成にはこだわった。また、学生が述べるシャドーイングのトピックについてであるが、本テキストはそのような使い方もできよう。が、執筆者自身が取り入れている方法は、シャドーイングではなく、リーディング部分のネイティブの朗読に自らが重ね読みをさせていくやり方である。重ね読みの練習を行った上で、毎週、Google Classroom 上に音声ファイルを学生から提出させることを継続的に実施した。これは、コロナ禍の現在は特に有効であると実感する。通常のクラスでも、多人数のクラスでは、英語のやり取りや英語を読ませることが難しいが、ディスカッショントピックへの回答を含めて、音声ファイルで提出されたファイルを聞くと、教室の対面場面では自信がなさそうな学生が、楽しそうに英語を朗読する場面に何度も遭遇した。

学生のコメントにも見られる異文化理解の促進の効果についても考えてみよう。かつて、執筆者は「文学作品を通して『気づく』『感じる』力を引き出すための授業実践」という論文を発表したが、この研究では、文学作品を用いて「異文化理解に必要であると考えられる『気づく』こと・『感じる』ことに注目した授業」を行い、結果を検証した。文学作品を使用した理由は「文学作品が『情意的局面』に重点を置く学習プログラムの構築に適していると考えた」ためである。(18)「気づき」や「感じること」を増やし、「共感的理解」や思考力を学生が高められたという結果を得た。文学作品は感情を豊かにし、「気づく」こと、「感じる」ことが多く含まれており、また様々な「感情」を読み手に引き起こさせるのである。(18)拙著では、中村愛人の「文学作品は感情を豊かにし、共感する力を育てることができ、さらに普遍性と個性を備えておりその普遍性と文化特有の個性があるからこそ共感する力や感受性を育むことができる」(18)を引用し、文学作品を読むことで、その背景にある異文化の様々な事象に気付き、異文化の背景の中で動くキャラクター達の心理的側面に同調しながら感じ、それについてなぜそのような行動や言動を取るかを考え、そこから学習者の共感的理解につながることを論じた。研究の検証からは、「気づく」→「感じる」→「考える」→「共感的理解」というプロセスが、英語の文学作品を使用することで成り立つ可能性が高いこと結論づけている。(21)

以上、英語の文学作品を英語教材として使用することによって、英語実践力の向上につながるという良い例を挙げてきたが、最後に課題と問題点について考えることとする。

## 6.

執筆者が編集した 3 冊の英語テキストは、いずれも、19 世紀から 20 世紀のアメリカ小説を素材としている。それぞれのテキストにおいて使用した作家の作品を以下に列挙する。

## ① 『Let's Learn English from American Literature』

Luisa May Alcott	<i>Little Women</i>
Sherwood Anderson	"Paper Pills"
Charlotte Gilman	"The Yellow Wallpaper"
O'Henry	"After Twenty Years"
F. Scott Fitzgerald	<i>The Great Gatsby</i>
Mark Twain	<i>Adventures of Huckleberry Finn</i>
Edgar Allan Poe	"The Black Cat"
Nathaniel Hawthorne	<i>The Scarlet Letter</i>
Ralph Waldo Emerson	<i>Nature</i>

## ② 『Let's Learn English from American Literature II』

William Faulkner	"A Rose for Emily"
Ernest Hemingway	"The Short Happy Life of Francis Macomber"
Ernest Hemingway	<i>The Old Man and the Sea</i>
John Steinbeck	<i>Of Mice and Men</i>
Saul Bellow	<i>Seize the Day</i>
Hisaye Yamamoto	"Seventeen Syllables"
Leslie Marmon Silko	<i>Ceremony</i>

## ③ 『Let's Learn English from American Literature III』

Paul Auster	<i>Moon Palace</i>
Raymond Carver	"Cathedral"
Nathaniel Hawthorne	"Wakefield"
John Cheever	"The Country Husband"
Philip Roth	<i>The Human Stain</i>
Toni Morrison	<i>Beloved</i>
Kate Chopin	"The Story of an Hour"

リスト内に含まれているアメリカ作家は、いずれもその時代を代表するポピュラーな作家であり、使用している小説も有名なものばかりであるが、この種のテキストを作成するにあたっては、当然アメリカ文学の知識が必要である。これらの小説から、リーディングパートを構成するために、学習者が理解しやすい箇所、途中抽出してもわかりやすい箇所を、一章当たり約 500 語で選び出す必要があるが、これは小説全体に精通していないと、難しい作業である。アメリカ文学の研究者でないと、この類のテキスト作成は、取り組みが難しいと考える。もともと英語教育と英米文学の研究者の歩み寄りが少なかった過去もあり、このようなテキストの作成には、執筆者と早瀬のような背景と関心を持つ研究者が取り組みやすいのであろうが、そのような立場の研究者も増えつつあるのは事実であるが、まだそれほど数は多くないのではなかろうか。

最も大きな課題は、原著から一部を抽出してリーディングパートを作っているため、Exercise 最後の Agree or Disagree パートでの問いについて、「小説をすべて読み通していないため答えられない」という声があることである。例えば『Ⅲ』に収録したモリスンの Agree or Disagree パートの問題は以下の二問である。

1. セサがビラヴィッドを殺したのは、赤ん坊を抱えていては逃げられないと考えたからである。
2. ビラヴィッドが幽霊となってセサの前に表れたのは、復讐のためである。(54)

『ビラヴィッド』は、長編小説であり、時間軸が行ったり来たりし、登場人物の関係も複雑である。テキスト内に用いたリーディングパートは、その中でも理解しやすい部分を使っているが、わずか 500 語のリーディングで、上記の 2 問に答えるのは、かなり難しい。答えることはできるが、内容は浅薄なものになるの

は致し方ない。最も、このことを不満に思い、原著すべてを読み解こうという学習者に動機付けを与える意図もあるのだが、一般の学習者の場合に、本を手取るには少々ハードルの高い作品かも知れない。それはわかっておりつつも、この作品を含めたのは、19世紀のアメリカ南部の奴隷制の悲惨さを少しでも、学生に感じてほしかったからである。少しの部分でも、セサの語りを読めば、人種差別の問題に関して「人種差別はひどい」「差別はやめさせるべきである」というような薄っぺらなコメントはできなくなるはずである。小説には、口語や方言も多く含まれており、読みにくくわかりにくいのは事実だが、これを平易に書き直すことは、上に述べた「共感的理解」を極端に減らすことになる。

要は、執筆者が考える課題は、アメリカ小説の一部分を抽出して、学習者に考えを問いかけていることから生じているのであるが、解消するための一定の方向性も実はわかっている。それは、一つの作品でこの類のテキストを作成することなのである。が、実際一つの作品といってもその本文すべてを掲載することは難しいであろうし、結局はある部分を抜き出さざるを得ないかもしれないことと、果たして一つの作品に関して学習者の興味が持続するのか、という2点が気にかかる。興味の持続のためには、ディスカッションを行う活動に加えて、さらにより活動型のExerciseを入れることも一つのやり方だと思うが、具体的にどのような活動を増やせば、一つの文学作品への興味の持続につながるのか、この点については、未だ検討の途中である。

## 7.

アメリカ文学の小説を、リーディングの素材として使用し、訳読を用いず、練習問題も含めて内容理解を進め、最後にディスカッションをさせるタイプの授業を大学で行ってきた。学生の声にもあるように、興味と関心を引き出し、更なる学習の動機づけにもつながったということは、確かに言えよう。何より、『ピラヴィッド』での「娘ピラヴィッドが母セサの前に表れたのは、母への復讐のためである」というトピックにあらわれているように、衝撃的な内容のテキストを読ませて学生に問いかけをする中で、学生は日常生活の中では絶対に体験しない状況を仮想体験し、登場人物の心情に共感し、そこから「なにかを思わずコメントしたくなる」という状態に至る。「思わず言いたくなる」ように学習者に促すというのが重要な点であり、テキストを読んで感じる学習者自らの思いが、英語で口から出やすくなるはずである。

テキスト内で見られる、登場人物同士のやり取りも、実際のやり取りにつながるものが多く、実生活の中のやりとりにこれらがうまくつながれば、英語の実践的能力の向上につながるはずなのである。

今回の研究は、対象者が大学生であり、言語材料の問題は厳密に対応しなくても済む側面がある。この検討結果がそのまま小中高等学校の英語教育の世界に、すべてあてはまるということ言うつもりはない。ただ、ある状況の中で、登場人物が自らの言葉でやり取りをする、思いを吐露する場面に子どもを出遭わせれば、必ずや興味を持ち、何かを言いたくなるはずなのである。たとえば、反応するその言葉が最初は短くシンプルであっても、繰り返すことによって、口から出てくる英語のことばの分量は増えるはずである。それが、英語力の向上を意味するのではあるまいか？フィクションの教材のみが有効であると言うつもりは毛頭ない。TOEICやTOEFL教材も、もちろん有効である。フィクションとノンフィクション、どちらも、バランスよく教科書内で配置することによって、学習者の英語力は必ず伸びる。今回の研究結果は、文学教材の有効性を示し、これまでバランスを欠き気味であった英語文学の素材をより盛り込むことの意義を示したところまでとする。今後の研究の継続は必然である。

アメリカ文学の小説を用いたのは、執筆者と早瀬がアメリカ文学の研究者であることによるのだが、このような取り組みが、イギリス文学の研究者へと繋がることも切に願う。作成したテキストには、教授用資料をつけているが、Exerciseの回答のみならず、作品評価、全訳（試訳）、Agree or Disagreeのトピックに関する詳細な解説、推奨する研究書名を収録している。これは、文学の研究者であるからこそ取り組めたことであり、この種のテキスト作成や授業の試みには、英米文学の研究者が今後積極的に関わるべき仕事であると改めて最後に強調したい。



## 引用文献

- 『*Let's Learn English from American Literature*—アメリカ文学から英語を学ぼう』早瀬博範, 江頭理江編 英宝社 2010 年。
- 『*Let's Learn English from American Literature II*—アメリカ文学から英語を学ぼう II』早瀬博範, 江頭理江編 英宝社 2015 年。
- 『*Let's Learn English from American Literature III*—アメリカ文学から英語を学ぼう III』早瀬博範, 江頭理江編 英宝社 2022 年。
- Hall, Geoff. *Literature in Language Education*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2005. 『江口 愛知教育大学紀要』
- Nishino, T & Watanabe, M. "Communicative-oriented policies versus classroom realities in Japan." *TESOL Quarterly*. 42 (1), 2008. 133-138. 『久世 情報科学』
- Shamsur, M Rabb Khan & Mohammad, Ali Alasmari. "Literary Texts in the EFL Classrooms: Applications, Benefits and Approaches." *International Journal of Applied Linguistics & English Literature*. 2018. 167-179.
- 江頭理江, 和田幸恵「文学作品を通して『気づく』・『感じる』力を引き出すための授業実践」『教育実践研究』福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター, 第 15 号, 2007 年, 17-24。
- 江口 誠 「英語教育における文学教材の活用」『愛知教育大学紀要』2013 年, 77-84。
- 久世 恭子 「コミュニケーション能力育成についての一考察—文学教材を用いた英語授業から—」『言語情報科学』東京大学, 10, 2012 年, 73-89。
- 田口 誠一 「英語教育における文学教材 — O. Henry の "A Retrieved Reformation" とそのリトルド版を中心に」『尚絅大学研究紀要 人文・社会科学編』第 48 号, 2016 年, 71-84。
- 羽鳥 博愛 「生き残るか, 英語教師」『英語教育』51 (3), 2002 年, 51, 『久世 言語情報科学』
- 藤掛 庄一 「英語の学習環境の条件—環境汚染限を絶て—」『英語教育』53 (8), 1982 年, 12-14, 『久世 情報科学』
- 安田 優, 轟 里香 「英語学習における英語文学作品の有用性 —学習者の視点から—」『北陸大学紀要』第 48 号, 2019 年, 77-89。